

My Favorite Book 2016



小松高校の教職員のとおき
の1冊をお届けします。

『漱石のこぼし』	姜 尚中	(集英社)
在日二世の作者は8年前に『悩む力』で、百年前の漱石と同じ壁にぶつかる我々にエールを送った。そして漱石没後百年にあたる今年、今度は漱石の自身の言葉で、我々を勇気づける。松高生も授業で実施する『こころ』の言葉も掲載されている。私が座右の銘にしているのは「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。」(『道草』) ぜひ、本書を繙いてみて下さい。		
『文系学部解体』	室井 尚	(角川書店)
文科省の要請「文系学部・学科の縮小、廃止」。研究に費やす時間を奪われている大学の現場。大学で本当に必要な知は何か、考えさせられる一冊です。		
『置かれた場所で咲きなさい』	渡辺 和子	(幻冬舎)
置かれたところこそが、今の自分の居場所。「こんなはずじゃなかった」と思う時に、「もう少し努力する力」が得られる一冊です。		
『アノミヅへ夢を旅した少年〜』	パウロ・コエリョ	(新潮社)
何度も見た夢に従い「自分にとって本当に大切なものは何か」を問い続けながら旅をする少年の物語で、月並みな言い方ですが「何度も読み返したくなる。シンプルで深い本」です。HarperCollinsから英語版も出てます。		
『山椒大夫・高瀬舟』	森 鷗外	(新潮文庫)
短編がいくつか入っています。「山椒大夫」も「高瀬舟」もおもしろく、命や生き方について考えさせられますが、「最後の一句」がオススメです。文字通り、『最後の一句』が胸に刺さります。読んでみては？		
『天地明察』	冲方 丁	(角川書店)
教養のための読書もありますが、やはり娯楽としての読書が楽しい。読んでおもしろく教養がつくなら言うことなし。江戸時代の暦作りに生涯をかけた実在の渋川春海と、天体観測に基づく暦作りについて、筆者の深い知識に感心し恐れも感じました。数学への関心も再確認しました。		
『ブラック・ヴィーナス』	城山 真一	(宝島社)
第14回『このミステリーがすごい!』大賞大賞受賞作です。書店さんに勧められ読みました。依頼人のもっとも大切なものを報酬に、大金をもたらす株取引の天才「黒女神」。助手を務めるのはメガバンクに失望した元銀行員。この二人のやりとりと依頼人が加わって面白い。著者が石川県出身で、北陸新幹線、知っている地名やたぶん〇〇のことだろうと思わせる記述があったりと、株取引を舞台にした小説ですが、難しさを感じることなく、一気に読むことができました。		
『いっぺんさん』	朱川 湊人	(文春文庫)
何年も前に読んだ本を久しぶりに読みましたが、心が温まりました。8編からなる短編集なので時間がない人でも分けて読むことができるかと思います。いっぺんだけ願いを叶えるという神様を友だちと探しに行った少年のせつない物語などです。ちょっと恐い話もありますが、全体的に感動できます。独特の世界を描き出している作者です。		
『羊と鋼の森』	宮下 奈都	(文藝春秋社)
「羊と鋼」で作られた楽器ピアノ。山村で育ちピアノに触れたこともない高校生の外村くんは、偶然の出会いから調律師として生きよう決めます。センスも経験もないゼロの状況から不器用ながらも一歩ずつ進む外村くんの言葉は、静かに心に沁み、そして元気をくれます。2016本屋大賞受賞作。		
『シゲイラ・タイズ』	坂本 司	(光文社文庫)
大学2年夏、サキは母親の作略にはめられ、大っ嫌いな歯医者で受付のアルバイトをすることに。個性的で、患者に思いやり深く接するスタッフに次第に心を許していくサキ。クリニックに持ち込まれるのは、虫歯だけではない。患者さんの心には大切な秘密が埋められていて…。サキの忘れ難い夏が始まる。		
『2.43清陰高校男子バレー部』	壁井 ユカコ	(集英社)
バレーボール関係の本を探している時に出会い、面白くてすぐに全巻読んでしまいました。弱小バレーボール部が紆余曲折を経て、全国大会に向けて頑張っていくお話です。部活動を通して、心身ともに成長していく高校生達の、青春！がぎゅっと詰まった1冊です。同じ時期を過ごしている皆さんにとって、共感する部分や、何か思う部分があるのではないのでしょうか。読みやすいので、興味があれば息抜きにぜひ読んでみて下さい。		
『こんな校則 あんな拘束』	坂本 秀夫	(朝日新聞社)
皆さんが入学した時にはすでに校則があって、「校則を守るのは当たり前」と考えている人が大半でしょう。しかし、知らない間に校則は「拘束」になっているかもしれません。「校則」やルールといったものについて、新たな視点を得られると思うので、是非読んでみてください。		
『さらば、資本主義』	佐伯 啓思	(新潮社)
経済の成長、物質的豊かさの追求が最優先となってしまった社会に生きていることに気づいていますか？私たちが気づかないうちに、資本主義というシステムが社会全体の思考や行動を規定してしまっている。成長が止まり、格差が拡大している社会で、どう生きればよいのかを考えさせてくれる本です。		
『科学』	宮崎 市定	(中央公論社)
歴史の新書としては最高傑作の一つです。よく知られている中国の官吏登用試験制度の壮大で緻密な実態を分かり易く解説し、また当時のカンニングの方法を紹介するなど歴史好きの高校生には是非読んで欲しい本です。		
『船に乗れ!』	藤谷 治	(ジャイブ)
高校時代に読書にハマったきっかけの本。そして大人になった今、改めて読み返してみたい本。高校時代は専門ではないとはいえ音楽に関わっていたので、共感しながら、そしてハラハラしながら読んだ記憶があります。		
『俺たちの旅 青春編 恋愛編 出発編』	鎌田敏夫	(角川書店)
1970年代放映の人気青春ドラマの小説版でいわゆる「学園ドラマ」ではない青春ドラマで、胸にジーンとくるエピソードが盛りだくさんです。”生きていることの、本当の意味は、学校では、教えてくれない。”		
『ソワソワを撃て』	高村 薫	(新潮文庫)
IRAテロリスト、リヴィエラのコードネームを持つスパイ、CIA、MI5、MI6などの国際諜報機関や、鍵を握るピアニストが登場し、複雑な人間模様、そのスケール大きさに圧倒され、一気に読んでしまい以後「高村 薫」ファンになりました。「北アイルランド問題」など地理の学習にも大いに参考になります。最終場面で、プラームスのピアノ協奏曲2番第3楽章の演奏中に息詰まる緊張するシーンが描写されています。プラームスを聞きながら最終場面を読むとさらに感動すること間違いなし。		
『わたしが正義について語るなら』	やなせ たかし	(ポプラ新書)

My Favorite Book 2016

著者は「アンパンマン」の作者。戦争体験を背景にして、人生を歩む中で「正義」とは何かを考えます。正義の味方と聞けばカッコいいが、本当の正義とは一体どのようなものなのか考える1つの視点を与えてくれます。

『グレートトラバース 日本百名山ひと筆書き』 田中 陽希 (NHK出版)
石川県加賀市出身の作家、深田久弥によって選ばれた九州から北海道に散らばる「日本百名山」を、人力(山道は登山、車道はランニング、海・川はカヤック)で走破した田中陽希さんの本です。距離約7800km、208日と11時間をかけての完走でした。単なるチャレンジの記録ではなく、田中陽希さんの思い、旅を進める中でさまざまな人と触れ合うことで変化していく考え方・苦悩などが示されています。私たちには簡単にできることではありませんが、偉大なチャレンジを行う人の考え方に触れてみるのもいい刺激が得られると思います。

『雷桜』 宇江佐真理 (角川書店)
とにかく桜の描写が美しい。運命の波に翻弄されながら、愛に身を裂き、凜として一途に生きた主人公遊の姿を桜と重ねあわせた、ファンタジーのような描写が印象的な作品です。「髪結い伊三次」シリーズも良いです。

『変えていく勇氣』 遠藤 保仁 (文藝春秋社)
サッカーファンならずとも有名な遠藤選手の長年の日本代表にかかわった様々な話。前例踏襲は私の1番嫌いな言葉。「常に改革・革新を考えるには」と気持ちのいい書籍です。

『ガンリン生活』 伊坂 幸太郎 (朝日新聞出版社)
語り手は緑のデミオ。望月家が巻き込まれる事件について隣のカローラと情報交換しながらあれこれ推測する。「地にタイヤが着かない」「開いたボンネットが塞がらない」など感情表現がおもしろい。

『感動する!数学』 桜井 進 (海竜社)
数学とは「発見」であり「芸術」であり「ドラマ」であり「宇宙」であり「夢」であるとする一冊。数学のロマンを感じることができます。

『すばらしい数学者たち』 矢野 健太郎 (新潮社)
この本を読んで、少しでも数学に興味を持ってくれたらうれしいです。

『左手一本のシュート』 島沢 優子 (講談社)
涙なくしては読み切れません。人が持つ「夢」や「こうなりたいという思い」は、不可能なことも可能にする。人生のなかで、苦しいときもきつと勇気をもらえ、そして本気で頑張れば周囲の人が支えてくれる、そんな思いを持てる本です。

『新しい道徳』 北野 武 (幻冬社)
「道徳とは何か?」この問いに正確に答えられる大人は少ないと思う。道徳や正義は時代と共に変化する絶対的なものではない。常に時代をリードする、北野武の才能を感じます。

『草原の風』(上)(中)(下) 宮城谷 昌光 ()
後漢の創始者 劉秀の生い立ちやどのようにして「新」を倒したかが描かれている。別の作者で「光武帝」という本も読んだが、この本の方がより焦点を当てて描かれているように思う。宮城谷氏の本はどれも面白いので是非読んでみてください。

『20代にしておきたい17のこと』 本田 健 (だいわ文庫)
10代~50代までのものがあります。しておきたいことをやっていきましょう。

『結果を出せる人になる!「すぐやる脳」のつくり方』 茂木 健一郎 (学研パブリッシング)
嫌なこと、めんどくさいことはついつい後回しにしてしまう…そんな自分を治したい!と思う人はこれを読んで一緒に治そう。

『超ディープな深海生物学』 長沼 毅・倉持卓治 (祥伝社)
世の中にはこんな変わった生物がいるのか!と驚きながら、何度も読み直してしまいました。深海の不思議な世界を垣間見てみませんか?

『夢をかなえるゾウ』 水野 敬也 (飛鳥新社)
大きな成功の裏には日々のちょっとしたがんばりが大切なのだな、ということを感じました。私はこの本を読んで、「明日の準備をする」を実践しています。みなさんも1日1つ、少しだけがんばってみませんか?

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』 東野 圭吾 (角川文庫)
私の「読書」は娯楽なので、後味のよさそうな本を読みます。その点東野圭吾氏には何度か、後味の悪い思いをさせられました。でも、元エンジニアの彼の本は、読書習慣のなかった理系の人にもきっと楽しんでもらえると思います。この本は、最後は温かく終わるので安心して読めますよ。

『日本人になった祖先たち』 篠田 謙一 (NHKブックス)
ヒトの起源、日本人のルーツをDNAから解明していく興味深い本です。

『部分と全体』 ハイゼンベルク (みすず書房)
科学者としての生き方について勉強になった。

『MASTER KEATON』 浦沢 直樹・勝鹿 北星・長崎 尚志 (小学館)
ユーリー・スコット先生も出てきます。何度も読みたくなります。

『困ります、ファインマンさん』 リチャード・P・ファインマン (岩波現代文庫)
ノーベル物理学者のエッセイ集ですが、ものすごく痛快で面白い。原題は“What Do You Care What Other People Think?”

『利己的な遺伝子』 リチャード・ドーキンス (紀伊國屋書店)
初版が1976年の古い本であるが、今読んでも色あせない。「我々がなぜ、何のために存在しているのか?」といった哲学的な問いに対しての一つの答えを知ることができる。

『奇跡の夢ノート』 石黒 由美子 (NHK出版)
目標(夢)は高く、とよく言われますが、その夢を持ち続けるために「ノート」とするという方法があります。夢や目標に向かって本気で頑張ろうとしている人にオススメ。

『幽霊人命救助隊』 高野 和明 (文春文庫)

My Favorite Book 2016

自殺した4人が神様から「自殺をしようとする人間の命を救え。」と言われ21世紀の東京に幽霊として送り込まれる。自殺願望をもつ人の命を救うために繰り広げられる救助作戦にハラハラしつつも、時折出てくるジョークが面白い。一人ひとりの命の重み、大切さを教えてくれる一冊であると思います。

『わたしを離さないで』	カズオ・イシグロ	(ハヤカワ文庫)
孤児院の中の話かと思っていたら、クローン人間の施設の話でした。クローン人間をつくることについて考えさせられました。		
『解剖学教室へようこそ』	養老 孟司	(筑摩書房)
解剖学を軸に、ものの見方、ことばの役割、こころと体などヒトについての捉え方を考えている本です。「そういう考え方もあるのか！」と気付かせてくれる一冊です。		
『ジョーカーゲーム』	柳 広司	(角川文庫)
舞台は昭和12年。米英との関係が悪化しつつある中で日本のスパイの活動を描いた本です。実写映画化、アニメ化もされているようですね。		
『日常の「なぜ」に答える物理学』	真貝 寿明	(森北出版)
日常に見られる物理現象をさまざまな実験やトピックによって説明している本です。高校物理で理解できる内容がほとんどで、授業で扱ったことが私たちの生活に活かされていることを実感できる一冊です。		
『夏への扉』	ロバート・A・ハイルン	(早川文庫)
キーワードは「猫」。主人公ダンと愛猫ピートの絆が好きで何度も読み返します。冷凍睡眠、タイムマシンなど、もはや古いSFのネタではありますがストーリーも楽しめます。SF嫌いでも猫好きな人は読んでみてください。		
『負けを生かす技術』	為末 大	(朝日新聞)
どう生きるか、どう考えるか、物事を測るモノサシの基準は、などアスリートとしての自分が考える価値観を伝えた本。		
『鹿の王』	上橋 菜穂子	(角川文庫)
2015年の本屋大賞を受賞した作品です。上下2巻でちょっと長い物語ですが、とても面白くて引き込まれてしまいました。		
『長嶋少年』	ねじめ正一	(文藝春秋社)
NewS zeroで又吉直樹さんが、東日本大震災に遭った東北の中学校を訪ねて講義をしている一場面をたまたま見ました。そのとき紹介していた本で、買って読んでみました。決して恵まれた環境ではない主人公の少年は、長嶋選手に憧れ、成りきり、近づこうとすることで生きていく話で、若い時に自分の生きがいになるほどの目標や憧れとなる誰かを見つけることも、生きる力になるのではないと思いました。		
『成功をめざす人に知っておいてほしいこと』	リック・ピティノ	(デイスカヴァー・トゥエンティン)
「タイム」誌、「ニューヨーク・タイムズ」紙が絶賛する傑出した指導力！バスケットボールの名監督が語る能力を最大に発揮する方法		
『Switch「変わらない」を変える方法』	チップ・ハース&ダン・ハース	(早川出版)
日々の生活において、私たちの中で「象(感情)」と「象使い(理性)」が戦っている。怠け者だけエネルギーの源になる「象」。計画的なリーダーだけ、頭でっかちで空回りすることもある「象使い」。普段の自分を変えてみたい人には、「へえっ！」と感じる1冊かも。		
『準備力』	遠藤 友彦	(KS株式会社)
野球関係の本ですが、日常生活でも活かせること間違いなし！「成果を出したいから準備をする。準備をするから成果が出る。」心を揺らさず日々歩むために、大切なことが詰まっています。目標を達成したい人はぜひ！		
『リベロ革命』	田中 モトユキ	(小学館)
近年の全日本女子バレー躍進の裏側に潜む、指導者眞鍋の独自の観点が盛りだくさん。バレーに限らず、スポーツ指導に関わる斬新な視点や、裏話などもあります。そんな考え方もあるんやー！と、思えるかもしれませんよ！		
『FBI捜査官が教える「しぐさ」の心理学』	ジョー・ナヴァロ マーヴィン・カーリンズ	(河出書房)
体の中で一番正直なのは、顔ではなく脚と足だった！「人間ウソ発見器」の異名をとる元敏腕FBI捜査官が、人々が見落としている感情や考えを表すしぐさの意味とそのメカニズムを徹底的に解き明かす。		
『トップ1%のサッカー選手に学ぶ成功哲学』	水野 俊哉	(すばる舎)
サッカー選手・監督の言葉を読みながら、有名な成功法則を学べます。スポーツだけではなく世の中全体でも通用するものが多いと思います。		
『塩狩峠』	三浦 綾子	(新潮文庫)
高校時代この本に出会い、こんなに涙を流し、心が揺さぶられたのは初めての経験でした。宗教的なものに関心がない人も、この本には引き込まれると思います。本当の愛とはどういうものなのか、生きるとはどういうことなのか、深く考えさせられる一冊です。		
『20才のときに知っておきたかったこと』	ティナ・シーリング	(阪急コミュニケーションズ)
この本は10章から成り立っていますがどこからでも読み始めて下さい。私の好きな言葉で「光り輝くチャンスを逃すな」、「あなた自身に許可を与える」、「早く何度も失敗せよ」など他にもありますがそれは新しい読書の時に。きっと心に届く言葉が見つかります。		
『ニワトリを殺すな』	ケビン・D・ワン	(幻冬社)
10年ほど前に発行された本ですが、「創造」とは何かというテーマにヒントを与えてくれる一冊。著者は世界に83の事務所を持つ経営コンサルタントです。		
『雇用破壊一三本の毒矢は放たれた一』	森永 卓郎	(角川新書)
昔、NHKスペシャルが、ニューヨークのチャイナタウンで時給わずか1ドルで働く中国人を取り扱っていた。彼らは一日14時間働き、本国の家族に仕送りをする。この本の著者は「(日本企業が、)中国人並みの低賃金で、中国人並みに切り捨てやすい労働力が手に入る」社会がやってくると危惧する。		
『自転車ツーキニスト』	足田 智	(知恵の森文庫)
自転車通勤に目覚めた著者が、自身の体験やそこから見える社会について、さまざまなアングルから述べている。中でも興味深かったのは、かつて1980年代終わりにスティーブ・ジョブズが、「パーソナルコンピュータの理想像は？」と聞かれて「自転車のようなコンピュータ」と答えたという逸話だ。勤のよい自転車好きの松高生なら、きっと分かるはず？		
『猿丸幻視行』	井沢 元彦	(講談社)

My Favorite Book 2016

百人一首「おくやまに紅葉踏み分けなく鹿の…」の作者、猿丸大夫の謎、その子孫に起こる殺人事件を若き日の折口信夫が解決する?!とにかく中身の濃い歴史SF推理小説。高校時代、ワクワクしながら一気に読み終えたことを思い出します。日本史、古文好きの人におすすめです。

『英語の歴史』	寺澤 盾	(中公新書)
英語って勉強すればするほど不思議な言葉ですよ。debtのbは発音しないし、bloodやfoodの発音はなぜ違う? dataのような-sをつけない複数形など例をあげたらきりがありません。英語の過去から未来まで取り扱っているこの本はその答えを教えてください。		
『チルドレン』	伊坂 幸太郎	(講談社)
短編小説かと思って読んでいくと、1つ1つの物語が絡み合っていて最後に……。おかしくて、ちょっと泣けて、スカッとします。		
『昔話の深層 ヲケ心理学とグリム童話』	河合隼雄	(講談社)
大学で英米文学を専攻し、文学作品を心理学の視点を用いて読み解くなどということをやりました。河合隼雄さんを尊敬していますが、これはユング心理学による童話の解釈。人間の奥深さを感じたい人は是非読んで下さい。		
『The Incredible Truth about Motherhood マザー』	ブラッドリー・トレバー・グリーン	(竹書房)
大ヒットを記録したブルーディーブックシリーズは、動物たちの心あたたまる写真とキレイのある言葉(英語)で、一気に最後まで読ませてくれる作品です。生命のスタートはマザー。この作品は母親の子育ての視点から人生を見つめ、ついつい周囲への感謝を忘れてしまいがちな私たちに、はっと何かを気づかせてくれます。		
『ロケのみなさんにお伝えしたい48のWhy』 フックション(仮)	厚切りジェイソン	(びあ株式会社)
“Why Japanese People!?”のネタでおなじみの芸人・厚切りジェイソンが、Twitterでの人生相談を痛快的なコメントとともに紹介しています。「人付き合いが苦手」や「なぜ勉強しなくちゃいけないの?」など、皆さんが共感できそうな相談もありますよ。		
『よるこびの歌』	宮下 奈都	(実業之日本社)
今年『羊と鋼の森』で本屋大賞を受賞した宮下奈都さんの作品。受験に失敗した、怪我がもとで部活から離れた……様々な葛藤を抱える人たちが少しずつ状況と向き合い始める、その心の変化に読む側も背中を押してもらえます。わたしがこの人のファンになったきっかけの一冊です。		
『クラブアート』	プロイスラー	(偕成社)
宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』の原案となった本です。海外のファンタジー小説が好きな人にお勧めします。児童文学の枠を超えて大人も楽しめます。私は何度も読み返しました。		
『さぶ』	山本 周五郎	(新潮社)
人の心を打ち震わせるのは、人の言葉ではなく、その行動に秘められた内なる想い。それは時には残酷であるが故に美しく揺ぎ無い。愛の形とは何なのか、そして友情とは。人間が本当に面白く素直な存在だと感じ考えさせてくれる。		
『宝塚式「ガ」の25箇条」に学ぶ「美人」養成講座』	貴城 けい	(講談社)
“とある時期から”宝塚の“とある場所”に張り出されている「こんなことをしたらブスになる」という25箇条をもとに自分磨きの方法が紹介されています。これであなたも美人になれるかも。		
『火花』	又吉 直樹	(文藝春秋)
昨年芥川賞を受賞したピース又吉の話題になった小説です。とても読みやすいので、普段あまり本を読まない人にもおすすめです。		
『クラスルーム』	折原 一	(理論社)
謎の幹事からクラス会の案内が配られる。当時のクラスメイトにも、同様の案内が配られていた。しかし誰も幹事のことを知らない。なぜ、幹事の名前を誰も知らないのか。いつの間になかったことにしていた記憶があなたにはありませんか。易しいミステリーで読みやすい本です。		
『モノあふれ社会に生きる日本人へ! 「もったいない」の復活』	坂田 龍一	(文芸社)
平成9年に発行された本です。モノの命を使いきる「もったいない」という気持ちが、環境(大気・水・土・生物)を守る暮らしにつながる。17年経っても読み返せる一冊です。		
『母が重くてたまらない墓守娘の嘆き』	信田さよ子	(春秋社)
最近本を読んでいないのですが、ちょっと気になったので購入した本です。私と母との関係を自分の中で整理できないかなと思って読みました。本に書かれている事例は、極端な内容でしたが、何となく親娘の関係を確認できたかなと思います。女子のみなさん、お母さんとの関係に違和感を覚えたことはないですか??		
『理系あるある』	小谷 太郎	(幻冬舎)
文系の私は常日頃から「理系の人」に尊敬の眼差しを向けている。この本を読めば憧れの「リケジョ」になれるかも?と手に取ってみた。因みにこれは「理系女子」の造語。実は講談社の登録商標なのだ!リケジョという言葉が生まれた経緯や、実際にそう呼ばれるとイラッとする理由が本書を読めばわかる。わかったことは、私はやはり文系の人間だ、ということ。		
『人魚の眠る家』	東野 圭吾	(幻冬舎)
脳死・臓器移植がテーマ。愛ゆえに常軌を逸した母親が切なく哀しい。未だに答えは見つからないけれど、最後の頁に救われました。		